



○ 2023年度 野生鳥獣による農作物被害状況（速報）

2023年度の農作物鳥獣被害状況について、愛知県の集計が完了しましたのでお知らせします。各市町村の担当者の皆様につきましては、集計等にご協力いただき、ありがとうございました。

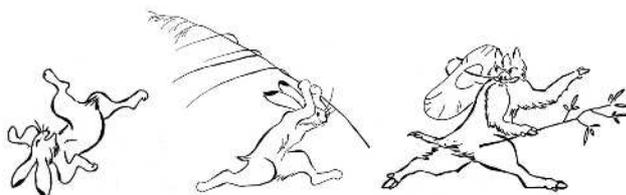
○ 愛知県の鳥獣被害状況

指標	被害状況	前年比
被害面積	622ha	124.1%
被害量	2,570t	105.2%
被害金額	4.72億円	98.2%

- ・被害面積は、鳥類が前年比 121%、獣類が前年比 128%となりました。
- ・被害量は、鳥類が前年比 104%、獣類が前年比 107%となりました。
- ・被害金額は、鳥類が前年比 92%、獣類が前年比 105%となりました。

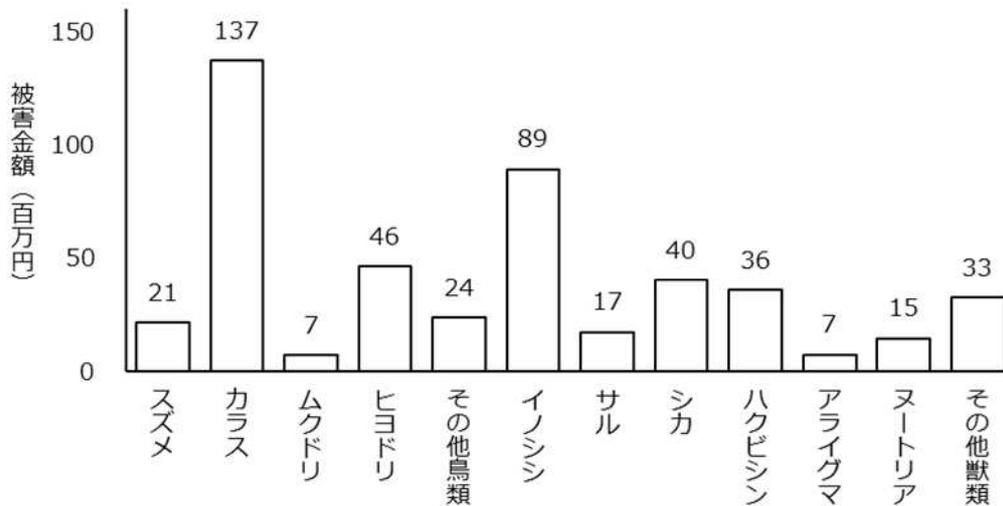


- ・愛知県内で鳥獣被害防止特措法に基づく総合対策が開始された2011年度以降、被害金額は4億円から5億円程度で推移しています。
- ・鳥類による被害金額が多く、都道府県別でも常に上位にあります(2022年度は全国第2位)。



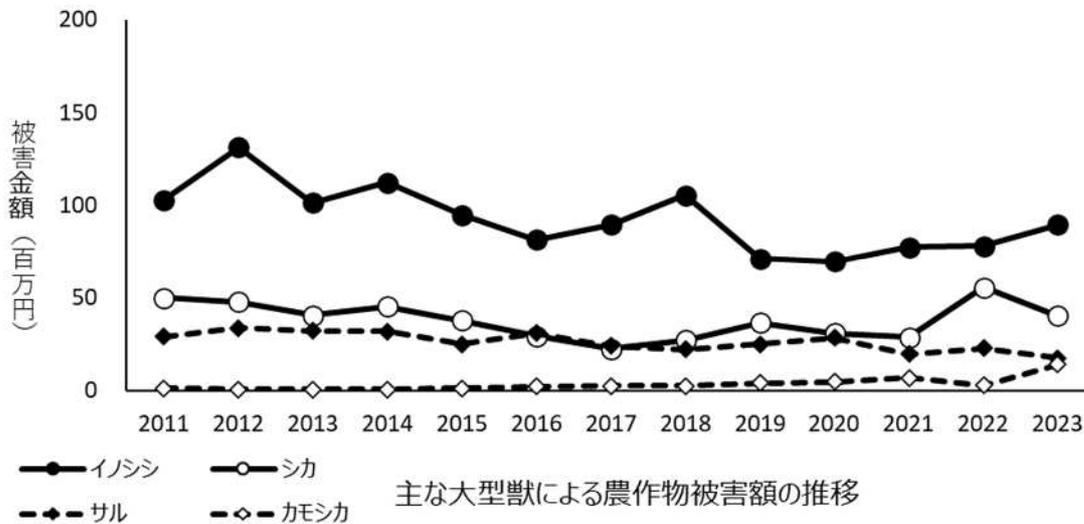


○ 鳥獣種別の被害状況



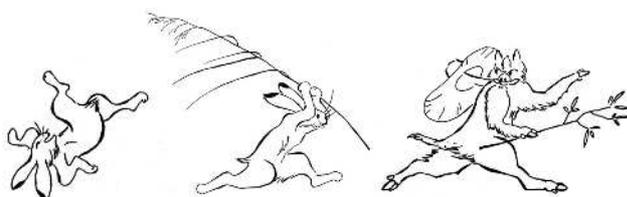
鳥獣種別の農作物被害金額 (2023年度)

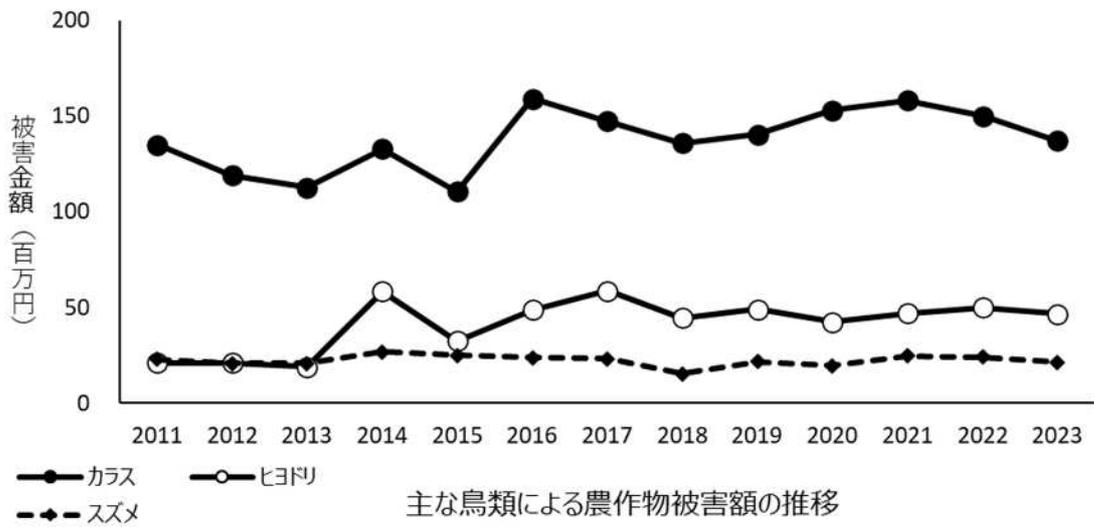
- ・2023年はカラス、イノシシ、ヒヨドリ、シカ、ハクビシンの順で被害が多くなりました。カラスが全被害額の29%を占めています。イノシシが19%、ヒヨドリが10%です。



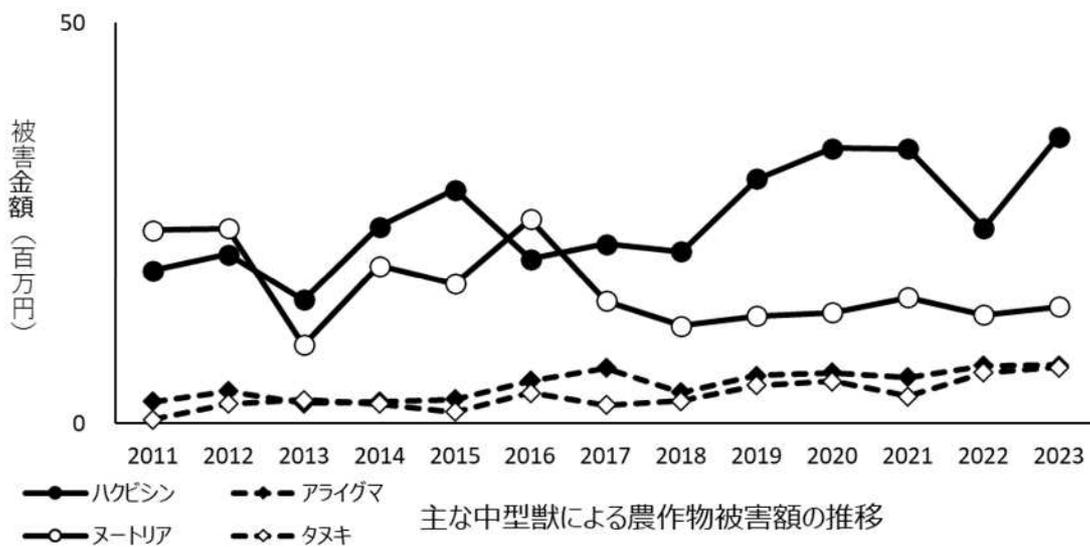
主な大型獣による農作物被害額の推移

- ・イノシシとサルの被害額は長期的には減少傾向にあります。シカは横ばい、カモシカは微増傾向です。一方で、イノシシは2019年、シカは2017年を底に、以降はやや増加傾向にあります。
- ・2023年度は2022年度から、イノシシが約1,100万円の増、シカが約1,500万円の減となりました。

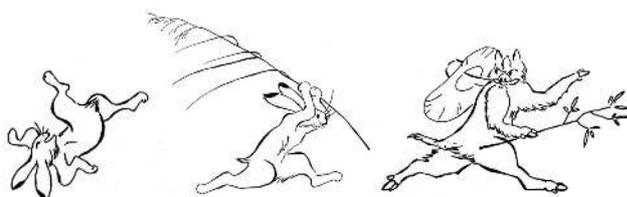




- ・スズメの被害額は長期的には横ばい傾向、カラスとヒヨドリは増加傾向にあります。鳥類は有効な対策が乏しいため、なかなか被害を抑えきれていないと推測されます。
- ・2023年度は2022年度から、カラスが約1,300万円の減、ヒヨドリが約400万円の減となりました。

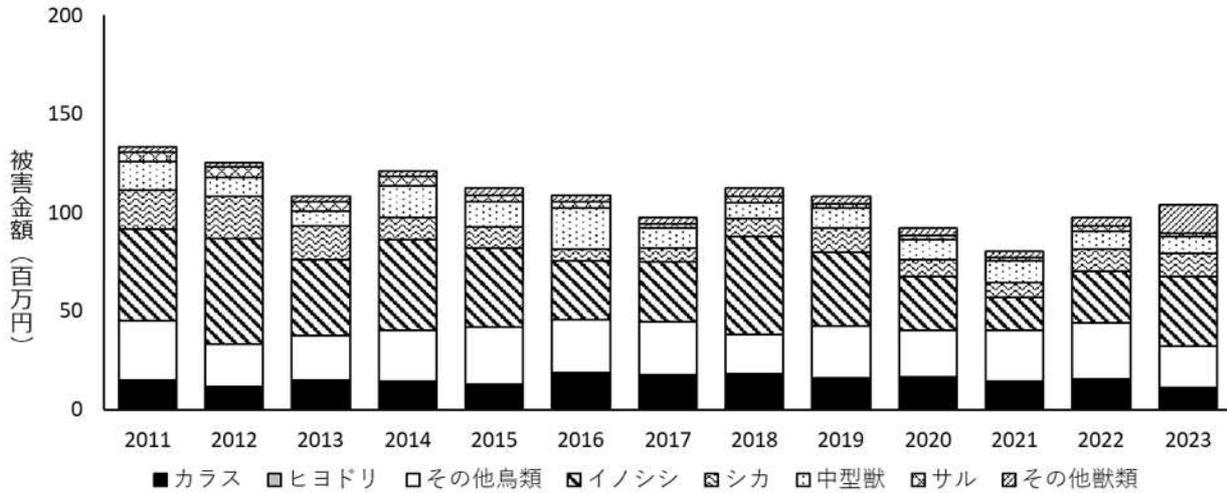


- ・ノートリアの被害額は長期的には減少傾向ですが、ハクビシン、アライグマ、タヌキは増加傾向にあります。こちらも、有効な対策手段が乏しいため、被害を抑えきれていないと推測されます。
- ・2023年度は2022年度から、ハクビシンが約1,100万円の増、ノートリアが約100万円の増となりました。



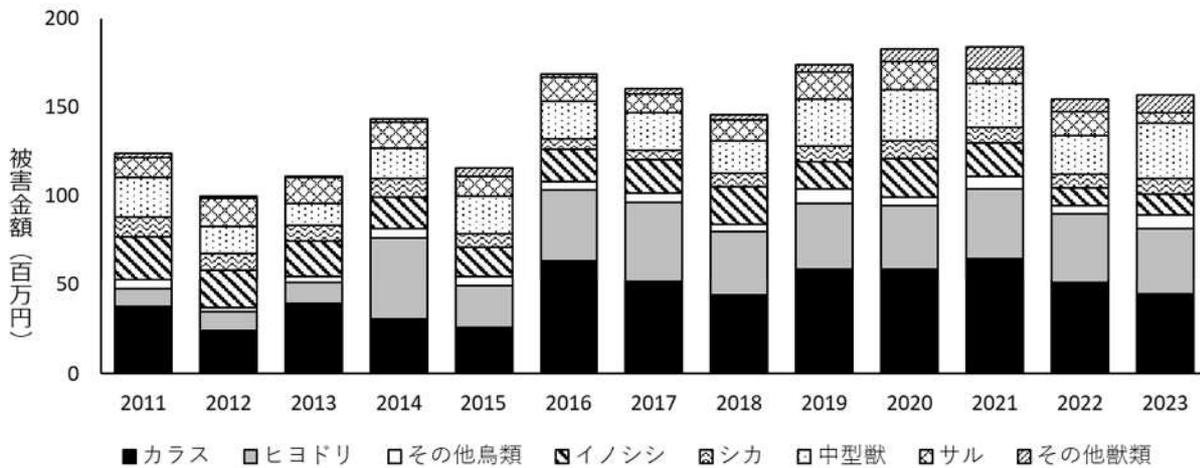


○ 品目別の被害状況



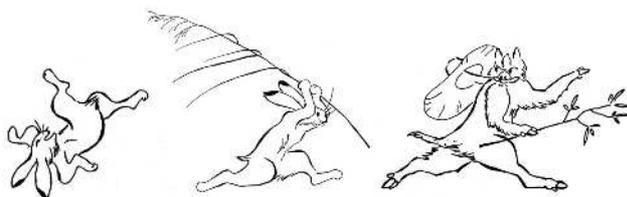
稲の被害額の推移

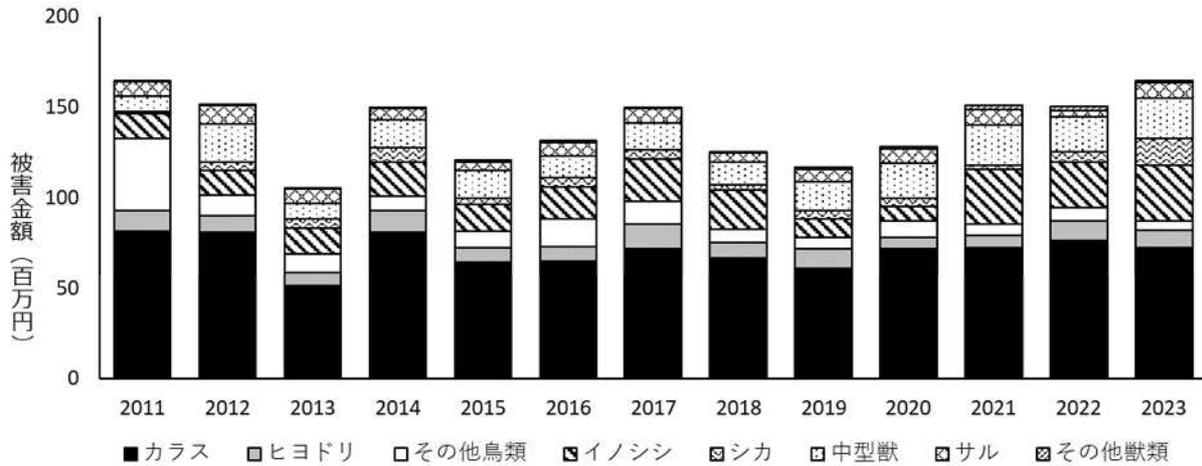
- ・稲の被害額は長期的には減少傾向にあり、特にイノシシの被害が減少しつつあります。鳥類やシカによる被害額は横ばい傾向です。
- ・2023年度の稲の被害金額は約1億400万円で2022年度から増加しました。イノシシによる被害が増加した一方、鳥類による被害が減少しました。



野菜の被害額の推移

- ・野菜の被害額は長期的には増加傾向にあり、特に鳥類の被害が増加しています。大型獣（イノシシ・シカ）による被害は微減傾向ですが、中型獣（ハクビシン・アラライグマ・ヌートリア・タヌキ）による被害は微増傾向です。
- ・2023年度の野菜の被害金額は約1億5700万円で2022年度から微増となりました。中型獣による被害が増加した一方、鳥類による被害が減少しました。





果樹の被害額の推移

- ・果樹の被害額は長期的には横ばい傾向にあります。鳥類による被害はやや減少傾向にあります。大型獣や中型獣による被害が増加しています。
- ・2023年度の果樹の被害金額は約1億6400万円です。2022年度から増加しました。特に、イノシシ・シカ・サル・中型獣による被害が増加しました。

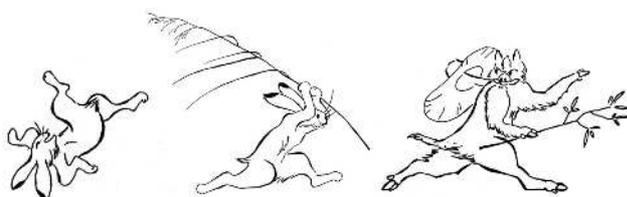
○ まとめ

- ・稲、野菜、果樹とも2022年度より被害が増加していますが、工芸作物（茶）の被害が大きく減少したことにより、被害総額では微減となりました。
- ・イノシシやサルの被害額は長期的には減少傾向にあり、また、稲の被害額も減少傾向にあることから、侵入防止柵の設置や緊急捕獲等による対策が少しずつ効果を発揮していると推測されます。一方で、対処しづらい鳥類や中型獣の被害が増加しています。有効な対策方法が乏しいものの、これらの対策も検討していく必要があります。
- ・鳥獣種別かつ品目別で見ると、「カラスによる果樹の被害」が最も多く、次いで「カラスによる野菜被害」「ヒヨドリによる野菜被害」となっています。テグスなどの導入により、これらの被害を抑えることを検討していく必要があります。

(NM)

○ 新城市和田集落における集落ぐるみの鳥獣害対策～鳥獣害対策三本柱の取組事例～

新城設楽農林水産事務所農業改良普及課（以下、普及課）では、NPO法人愛猟（以下、愛猟）とともに「生息環境管理」、「侵入防止」、「捕獲」の鳥獣害対策三本柱に関する鳥獣害対策研修会等を実施することで、鳥獣に強い集落の育成を図りました。なお、本取組は農林水産省の令和4年度・令和5年度鳥獣被害防止総合対策交付金を活用して実施されました。





○ 鳥獣害対策の取組

・生息環境管理

令和4年度には和田集落の住民（以下、住民）らが主体となって鳥獣被害の実態をアンケート調査しました。その結果、集落内の放任果樹にサルが集まっていることがわかりました。また、遊休農地の周りにシカの目撃情報が多いこともわかりました。次に、これらの情報を住民と共有し、今後の鳥獣害対策について協議しました。その結果、遊休農地や放任果樹の整理に取り組むこととなりました。

令和5年度には、放任果樹の伐採や、遊休農地の草刈りを実施しました。さらに、鳥獣追い払い用花火によるサルの追い払い方法の研修会を開催しました。住民は花火の扱い方や、サルは山の中まで追いかける必要があること等を学びました。

・侵入防止

令和4年度と令和5年度の秋に、それぞれ、集落を囲む侵入防止柵の点検を実施しました。倒木による柵の損傷、地際部の土砂の流出、雑草の繁茂など、侵入防止柵の管理の問題点が明らかになりました。その後、倒木による損傷部分は補修し、地際部の土砂が流された部分も修繕しました。さらに、侵入防止柵付近の雑草を刈り取り、管理しやすい状態にすることができました。

令和5年度には、ワイヤーメッシュ柵と電気柵の複合柵であり、サルに対する侵入抑制効果の高い「おじろ用心棒」の設置研修会を開催しました。「おじろ用心棒」を設置したほ場では、その後、サル被害は認められず、栽培した野菜を収穫することができました。さらに、「おじろ用心棒」のサル侵入防止効果を座談会で紹介し、他の住民らと、その効果を共有することができました。



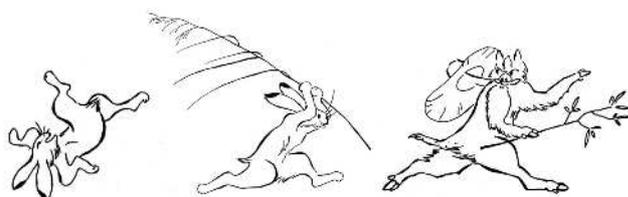
写真1 開口部から列をなして続々と和田集落に侵入するシカ



写真2 サル追い払い研修



写真3 侵入防止柵の保守点検・草刈り





・捕獲

令和4年度には、侵入防止柵の開口部となっている場所付近に箱わなを設置し、侵入個体の捕獲を試みるとともに、箱わなの使用方法を学びました。

令和5年度には、くくりわなでシカを効率的に捕獲するための研修会を開催しました。これは、餌付けによってシカを誘引し、くくりわなによって計画的に狙ったタイミングで捕獲する「なつやまメソッド」という方法です（詳細は次の記事をご覧ください）。まず、座学による講習を行い、次に、捕獲実習を集落内で開催しました。実習期間中ではシカへの餌付けは成功したものの、捕獲には至りませんでした。しかし、住民らは自動撮影カメラによってシカの行動を観察し、捕獲ができなかった原因を探ることで、捕獲技術の向上につなげることができました。



写真4 くくりわなによるシカ捕獲実習

○ 活動のポイントと今後について

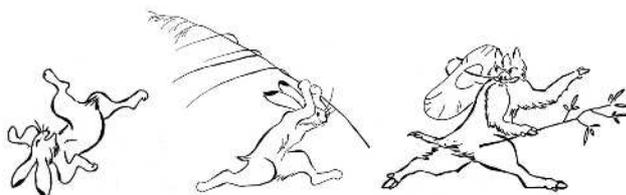
座談会（寄り合い）の頻度、被害獣種、柵の管理体制、捕獲従事者の人数は集落によって異なります。そこで、和田集落の実情を聞き取り、取組可能な鳥獣害対策を集落代表者、愛猟、普及課の三者で事前に協議しました。なお、各研修会の開催前にも三者が集まり、研修会の具体的な内容、開催時期、当日のタイムスケジュール、参集方法や参集範囲などを決定しました。また、研修会で集まった住民同士が鳥獣害の被害状況や対策方法の意見を交換することで、集落で困っていることや鳥獣害対策の要望を、愛猟と普及課が共有することができました。住民との話し合いや、住民同士の話し合いの場を設けたことで、集落の実情に即した鳥獣被害対策に取り組むことができました。

2カ年の活動の最後に実施した住民を対象にした研修会アンケートでは、「次期への活動ステップが見えてきた」、「獣害対策に対して意識が向上していくなれば良い」という前向きなコメントが寄せられ、住民の鳥獣害に対する意識の高まりを確認することができました。集落代表者からも、「住民主体の鳥獣被害アンケート調査の実施」、「侵入防止柵点検の継続」、「捕獲補助者制度の導入」を令和6年度から取り組む予定であると聞き取っています。鳥獣害対策に終わりはありません。集落ぐるみで協議を重ね、対策を続けることが最も重要です。

(Y T)

※本取組は2024年10月に「ネット農業あいち」にも掲載されております。ぜひ、「ネット農業あいち」もご覧ください！

URLはこちら <https://www.pref.aichi.jp/site/nogyo-aichi/>





○ なつやまメソッド ～現役世代が実践可能なわな捕獲の方法論～

○ 有害鳥獣捕獲の担い手確保が課題

有害鳥獣捕獲は、今やなくてはならない活動です。しかし、担い手が確実に減っており、今後も活動を維持するためには1人でも多くの担い手を確保しなければなりません。

担い手確保に向けた重要な考え方のひとつは、地域ぐるみで取り組むことです。有害鳥獣捕獲は被害防止活動の一環なので、農業者には確固たる動機があり、持続性が担保されます。しかし、実際は地区内の一部の人に負担が集中しがちで、周囲の農業者の活動参画をさらに促す必要があります。

○ わな捕獲の実践に立ちはだかるハードル

農業者の活動参画促進に向け、2010年頃からわな猟免許取得が進展しました。しかし、免許を取得したものの実践に至らないことが多く、担い手確保にはあまり繋がっていません。わな捕獲は免許取得が比較的容易で、簡単に取り組みそうなイメージを抱きがちですが、実は活動参画の難易度が高いのです(表1)。

一方、猟銃を使った捕獲は、免許取得と猟銃所持許可の難易度が高いものの、それ以降の活動参画はさほど難しくありません(表1)。猟銃を使った狩猟や有害鳥獣捕獲活動、射撃大会など、活動の多くはあらかじめ日時を決めてイベント的に実施されます。地域の狩猟者団体に加入し、狩猟等に参加したいとの意思表示をすれば誘ってもらえるので、自然な流れで活動参画することができます。

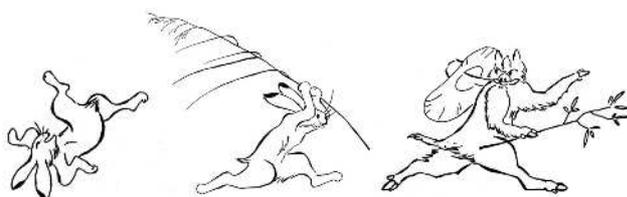
表1 捕獲方法別の難易度比較(黒い星が多いほど難しい)

方法	免許取得	猟具取得・所持	活動参画
猟銃	★★★★☆	★★★★★	★★☆☆☆
わな	★☆☆☆☆	くくり ★☆☆☆☆ はこ・罠 ★★★★★	★★★★★
網	★☆☆☆☆	?	?

では、わな捕獲への参画を阻む要因について考えてみましょう。それらを取り除くことが、実践への近道となるはずですが、わな捕獲の参画が難しい理由として、主に以下の3つが挙げられます。

- ① わなを架設したら、毎日見回って捕獲確認する必要がある。
- ② 捕獲されるタイミングが予測困難。
- ③ 鳥獣が捕獲されたら、直ちに対処しなければならない。

※架設とは、動物が捕獲される状態にわなをセットすることです。





一言で表現すると、「スケジュールを自由に決められない」ということです。

専業農家は日々農作業に追われ、経営管理、組合等の組織運営に関する業務も目白押しです。兼業農家であれば農作業は週末などに限定されるかもしれませんが、平日は会社員や公務員として勤務する方がほとんどです。当然ながら、非農家もしかり、です。年金受給前のいわゆる現役世代にとって、自由にスケジュールを決められない活動への積極的な参画は困難です。従って現状では、わな捕獲の実践は難しいと結論づけられます。

では、どうすればいいのでしょうか。

今回ご紹介するなつやまメソッドは、日々仕事に追われる現役世代のためのわな捕獲の方法論です。

○ なつやまメソッドで活動参画を実現！

一旦、わなを架設すると、その後のスケジュールを自分で決めることができません。そこで、まずは捕獲予定日を決めて、その前日にわなを架設するようにします。たったそれだけのことです。難しことはひとつもありません。

「予定日前日にわな架設」こそが、なつやまメソッドのエッセンスです。なつやまメソッドは忙しい人向けのわな捕獲スケジュールリング手法であるといえます。

なつやまメソッドによるわな捕獲の手順の概要は以下のとおりです。

- ① 捕獲場所を決める(はこわなの場合は仕掛けを取り付け、扉をロック)
- ② 餌を置き、トレイルカメラで観察
- ③ 誘引状況を確認し、捕獲予定日を決定
- ④ 捕獲予定日の前日にわなを架設
- ⑤ 捕獲後、直ちにわなの架設を解除

スケジュールリングの例を図1に示します。時間的に余裕がある週末等を捕獲予定日とし、そこから逆算して餌付けと観察を実施します。

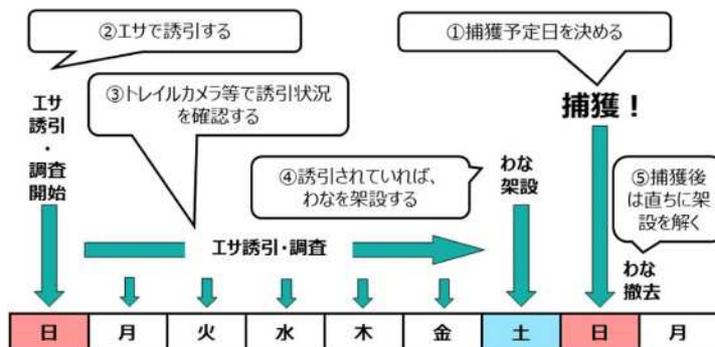
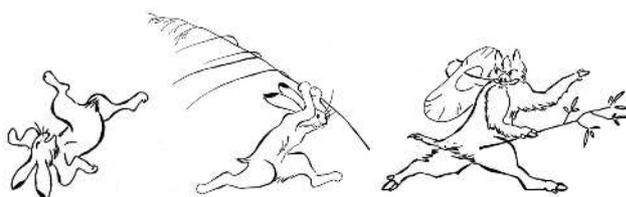


図1 なつやまメソッドによるスケジュールリング例
餌と観察以外の作業をすべて土日に実施するパターン





○ 限定的なわな架設期間で捕獲するために

毎日のわな管理が容易な非現役世代の方々にとっても、なつやまメソッドは簡単に実践可能です。しかし、長期間にわたって連続架設しないと捕獲実績が伸びないのではないかと考え、わなの架設期間を限定することに抵抗感を覚える方がおられるかもしれません。

この不安を解消するポイントが、餌付けとトレイルカメラを用いた観察です。これらは、農作業の合間にも十分に実施することができます。会社員や公務員の場合も、捕獲場所が自宅近くであれば、出勤途上等に対応可能です。はこわなはもちろん、くくりわなの場合も餌付けを実施し、トレイルカメラで観察すれば(図2)、非常に高い確率で捕獲することができます。



捕獲予定場所で餌付け開始



ニホンジカが出没



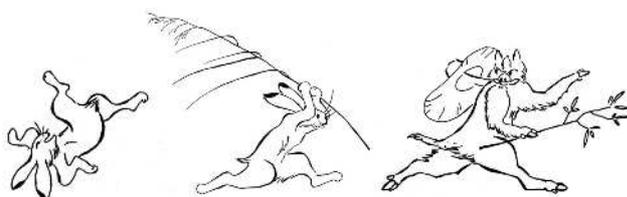
画像を観察してくくりわな設置
ポイントを決定



確実に捕獲

図2 餌付けとトレイルカメラを使った観察により確実に捕獲

2023 年度狩猟解禁直後の週末を捕獲予定日として実施した、愛知県野生イノシシ対策室及び環境局自然環境課による実証事例をご紹介します。2023 年 11 月 18 日(土)にわな架設、翌 11 月 19 日(日)に捕獲、止め刺し、解体(+ジビエパーティー)というスケジュールを作成し、11月11日(土)から、餌付け、トレイルカメラ観察を開始しました。ニホンジカが観察されたので、予定どおり 11 月 18 日(土)、8 地点にくくりわなを 26 基架設しました(図3)。翌 11 月 19 日(日)、狙いどおりニホンジカが 4 頭捕獲されました(図3)。





あらかじめ餌付けし、観察した場所にくくりわなを設置

翌日、ニホンジカを捕獲

図3 愛知県野生イノシシ対策室・環境局自然環境課による
なつやまメソッド実証事例

くくりわなによるニホンジカ捕獲の単位努力量当たり捕獲頭数(C P U E : 合計の捕獲頭数÷わな架設数÷わな架設日数)は、通常 0.01 程度とされます。この実証事例での単位努力量当たり捕獲等数を算出したところ、**4頭÷架設数 26基÷架設日数 1日 = 0.15** となりました。一般的な値の、実に 15 倍の捕獲効率を実現したこととなります。

つよっ！俺ら天才かよ！

と思いました。

完全なる自慢話で大変恐縮ですが、この日だけは、ベテラン猟師の皆さんを超越した気がします。もっとも、捕獲されたニホンジカの解体処理がめちゃくちゃ大変で、疲労困憊でしたが。

○ なつやまメソッドのメリット・期待されること

何よりも、スケジュール調整が可能になる点が大きいと考えられます。勤務、農作業、プライベートとの両立が可能になり、わな捕獲参画のハードルが一気に下がります。作業日が限定されるので、協力者を確保しやすいこともメリットです。特に、捕獲された個体の処分は危険が伴うため、誰かと一緒に実施することが重要です。わな架設期間を最小限とすることにより、錯誤捕獲等、安全管理上の懸念が少なくなります。

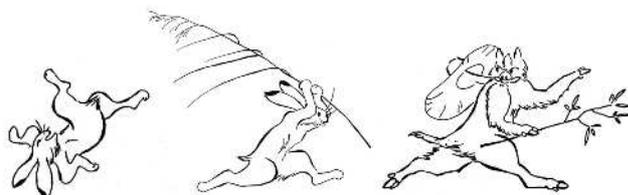
気の合う仲間にもスケジュールを共有し、イベント的に活動することができる点も魅力です。わな捕獲は被害対策のためにやむなく実施する孤独な作業というイメージが強いですが、猟銃を使った巻き狩りのようにグループでイベント的に楽しむことも可能になると考えられます。

まずは実証的に取り組んでみて、地域の実情に合わせて微調整し、捕獲従事者確保の一助としていただければ幸いです。

(T O)

○ 編集後記

今年こそ「獲っていいカモ」を覚えようと思うのですが、難しすぎん？ (NM)



愛知県農業水産局農政部
農業振興課野生イノシシ対策室
お問い合わせ TEL052-954-6726